

平成 26 年度中学校武道授業（空手道）指導法研究事業



平成 26 年 9 月 6 日（土）～7 日（日）の 2 日間、日本武道館大会議室において、全日本空手道連盟推薦の研究者 6 名と連盟事務局 2 名、研究協力者 6 名が参加し、平成 26 年度中学校武道授業（空手道）指導法研究事業〔主催＝（公財）日本武道館、（公財）全日本空手道連盟、日本武道協議会、後援＝文部科学省〕が実施された。

5 回目となる本研究事業では、従来、現役中学生の協力を得て模擬授業を行い、その中で問題を探り検討し、指導法の模索をおこなってきたが、2 年前から実際の中学校で、授業が始まり、生きた事例が上がってきているため、それらを探り上げてこの事業を行ってみようということになった。そのため会場を東京・日本武道館大会議室に移し、中学校で空手道の授業を行っている研究協力者 6 名からの授業実践例の報告と、『空手道指導の手引』の改訂に向けての内容精査・指導カリキュラムの検討・協議を行った。

■ 1 日目（9 月 6 日）

◆ 開講式

まず始めに、公益財団法人全日本空手道連盟有竹隆佐専務理事が主催者挨拶に立ち、平成 24 年度より完全実施された武道必修化に関して「空手道は当初より採用校が増えてきて大変喜ばしいことである。空手道の授業は、安全である、場所は問わない、費用もほとんどかからない、男女共に楽しめるなど、非常に利点が多い」と魅力を訴えた。続いて、公益財団法人日本武道館三藤芳生理事・事務局長より、「空手道授業は、高い評価を得て、24 年度比で約 6 割実施校が増えている。1 番大事なのは授業が生徒にとって役に立つこと。空手道は優れた特性を持っている。」と述べた。

◆ 指導法研究

全日本空手道連盟日下事務局長より、これまで千葉県勝浦市の日本武道館研修センターで行っていた本事業が、東京で開催されることになった経緯が説明され、午後から授業実践例報告をする研究協力者 6 名の経歴等を紹介した。続いて、富山県教育委員会に所属する岩城公二研究者より、文部科学省の武道授業の充実に向けた予算策定について説明がされ、そこから空手道が中学校の武道授業に採用されるための方策が提案された。

◆ 指導法研究〔学校現場からの報告〕

午後からは、研究協力者の 6 名が加わり、実践例報告・手引の改訂に向けた提案等の発表を順番に行った。

高橋 優子（練馬区立開進第三中学校外部指導者）

外部指導者を務める中学校では、全 6 時間で授業を行っている。1. 2 時間目は、礼の大切さなどを伝える、講義から授業に入っている。また、「空手道の形は、受けから始まる。受けは自分の体を守る意味もあるが、自分を傷つけようとした相手を加害者にせずに済む。結果的に相手も守ることができる」など、空手道の技術だけでなく、精神面を伝える指導も多数行っている。



喜納真由美（普連土学園中学校 非常勤講師）

外部指導者として授業を行っている。体育科教員の充実したバックアップ体制により、気持ち良く授業ができています。やはり体育科教員が空手道授業を行うことができるということが理想のように思う。外部指導者は、必要に応じて重要な時間に参加するような環境を整えれば良いと感じる。

大久保泰明（取手市立取手第二中学校 教諭）

所属する取手第二中学校の空手道授業は、全日本空手道連盟発行誌「あゆみ」に2号にわたって特集して貰った。空手道の授業では、「自己管理能力を養う」を今年度のテーマとして、生徒たちに伝えている。自己管理能力とは、相手を尊重する力・敬う力。学校生活における先を読む力である。このように、空手道授業を通して何を教えるか、ということ念頭に置き、指導している。



喜多 由美・石川美奈子（神奈川学園中学校 教諭）

毎年8月に行われている全国空手道指導者研修会を受講し、その経験を生かし空手道の授業を行っている。各授業のねらい・成果・反省・自己評価などを記す武道学習カードを使用。評価の点について、空手道経験のない教員には、空手道の技術的な評価の観点・基準が難しいと感じる。



山田 久吉（浪江町立浪江中学校 教諭）

所属校は、平成23年3月に発生した東日本大震災で被災し、現在は、廃校になった小学校の校舎で授業をしている。教員に採用されて27年間、柔道の授業を担当していたが、被災し、柔道場も柔道衣もない環境になったことを機に、何もない状況でもできるものと考え、空手道の授業に切り替えた。「生きるちから」から「生き抜くちから」をテーマに授業を展開。授業の成果を保護者から

の理解を得るべく、文化祭において発表した。



■ 2日目（9月7日）

◆指導法研究[「空手道指導の手引」改訂]

始めに、日下事務局長より「初日に先生方からの提案意見等を加味しながら手引の改訂に活かしていきたい。」との話があり、前回作成した手引の初版を元に、ページ割など細かな内容から協議に入った。主に文章の表現や写真・イラストの訂正などが協議され、写真においては、突きの拳の角度、相手との距離、受けの構えで左右の腕のどちらが前に来るか等、細かな内容まで精査された。

最後に、研究者1人ひとりより、本研究事業の感想が述べられ、閉講式を行い、2日間の全日程を終了した。

◇研究者

岩城 公二（全国中学校空手道連盟 理事長）

小山 正辰（森ノ宮医療大学 特任教授）

中村 武志（全日本中学校空手道連盟 事務局長）

松田 健（沖縄県中体連空手道副専門部長）

野中 史子（全国中学校空手道連盟 事務局次長）

井下 佳織（帝京平成大学 講師）

◇研究協力者

高橋 優子（練馬区立開進第三中学校 外部指導者）

喜納真由美（普連土学園中学校 非常勤講師）

大久保泰明（取手市立取手第二中学校 教諭）

喜多 由美（神奈川学園中学校 教諭）

石川美奈子（神奈川学園中学校 教諭）

山田 久吉（浪江町立浪江中学校 教諭）

◇全日本空手道連盟事務局

有竹 隆佐（全日本空手道連盟 専務理事）

日下 修次（全日本空手道連盟 事務局長）

◇日本武道館事務局

永嶋 信哉 今寺 直人（順不同・敬称略）

